

人は自身の性役割を望ましいと認識しているか -デート代の支払い方法について-

高知工科大学 経済マネジメント学群

三船研究室 原 悠人

序論

日本では1985年に男女雇用機会均等法、1999年には男女共同参画社会基本法が定められた。これを筆頭に男女平等を目指す社会の傾向がある。平成26年度の内閣府の調査では、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対して賛成派の意見が44.6%、反対派の意見が49.4%であった（内閣府, 2015）。一方、平成4年度の調査では賛成派60.1%、反対派34.0%であったことから、男性が仕事をし、女性が家庭を守るという日本の家庭の風潮は変化していることがわかる。しかし、のちの結果が示すように、デート代は男性が多く支払うことが多い。これには性役割とその認知が影響していると考えられる。性役割とは、人々が性別により、「男性は男性らしく、女性は女性らしく」とそれぞれ社会的に望ましいとされるパーソナリティのことである。

性役割にはさまざまな種類のものがある。ここでいくつかの先行研究をもとに性役割の具体例を示す。Pleck(1976)では、1970年代に他者とのつながりを重視せず、個人としての行動を重視する男性役割を「伝統的な男性役割」とし、対人的スキルを重視する男性役割を「現代的な男性役割」とした。

伝統的な男性役割の例として、「男性の価値は経済的な地位で決まる」や「男性は痛みを感じてもそれを人に見せてはいけない」などがある。渡邊(2017a)ではPleck(1976)の伝統的な男性役割を整理し、現代における妥当性を調査した。この研究で伝統的な男性役割には現代においても一定の妥当性があることが示された。

現代的な男性役割の例として、「デートした時、男性は女性の分までお金を払うのは当然である」や「男性は他人に対して優しくなくてはならない」などがある。渡邊(2017b)では、現代的な男性役割を「新しい男性役割」と置き換え、現代における妥当性を調査し、新しい男性役割にも、現代において一定の妥当性があることが示された。

また、性役割は性別によって社会的に望ましいとされるパーソナリティを守ろうとする規範でもある。伊藤・秋津(1983)では人間が性役割を認知するプロセスについて調査し、人々は青年前期ころには成人と同様の性役割を認知しており、学年が進むにつれ性役割の期待に沿った生活をするようになるということが示された。

問題

本研究では性役割の中でも特に、男性がデート代を男性が多く支払うという行動に着目する。男性は「デートした時、男性は女性の分までお金を払うのは当然である」などといった性役割を認知し、その役割を守ろうとして「女性の分も支払う」といった行動を選択していることが考えられる。しかし、「デートした時、男性は女性の分までお金を払うのは当然である」といった性役割があったとしても、実際にデートに行った女性は「男性に払ってほしい」と思っているのだろうか。また、男性は「男性が女性の分も支払う」ことを心から望ましいと思っているのだろうか。

性役割とは異なるが、橋本(2011)では日本人特有の相互協調的自己観に着目した文化的自己観について、日本人の相互協調性がいかに共有、維持されるかのプロセスを分析した。その結果、日本人は個人個人では相互独立的な生き方を好ましいと考えているが、世間一般の人は自分よりも相互協調的であり、また相互協調的な振る舞いを好むと考えているため、実際の自分は相互協調的に振舞っていることが示された。

「デート代の支払い」の場面でも橋本(2011)と同様に、男性も女性も個人個人ではデート代の支払いは平等に支払うことを望ましいと考えているが、「世間一般の人は男性が多く支払うことを望ましいと考えており、その支払い方を好む」と考えており、その結果「男性が多く支払う」という行動を選択している可能性がある。

目的

本研究では「男性が女性の分も支払いを済ませる」という行動に着目し、調査を行う。男性も女性も個人個人ではデート代の支払いは平等に支払うことを望ましいと考えている。しかし男性は「デートした時、男性は女性の分までお金を払うのは当然である」という性役割を認知しており、自分自身の考えと性役割にギャップを感じながらも性役割の期待に沿った生活をしようとすることから、「デート代を男性が女性より多く支払う」行動を選択している可能性がある。

調査では回答者自身が考える「男性が女性の分の支払いを済ませる」ことを望ましいと感じる尺度と、回答者の他人が考える「男性が女性の分の支払いを済ませる」ことを望ましいと感じているであろうと予想した尺度を比較する。

本研究では平等に支払う支払い方に対する望ましさは、自分自身の方が他人より高く、男性が多く支払う支払い方に対する望ましさは自分自身より他人の方が高いだろうという仮説を検証する。

方法

調査方法はアンケートを実施した。質問紙の内容は、男性用・女性用で分け、男性・女性のそれぞれに「異性とデートや食事に行った際の支払いの場面」を想定させ、その時の支払い方として①自分が相手より多く支払う支払い方②平等に同じ額を支払う支払い方③相手に多く支払ってもらう支払い方の3つを提示し、それぞれの支払い方がどの程度望ましいかを7段階で評価させた（1が望ましくない、4がどちらともいえない、7が望ましいとした）。次に、同じ場面で自分以外の同性の人が3種類に支払い方についてそれぞれどの程度望ましいと思っているか予想させた。次に、同じ場面で異性の人が3種類に支払い方についてそれぞれどの程度望ましいと思っているか予想させた。そして最後に回答者本人の過去の経験として、3種類の支払い方がどのくらいの割合で行われたかを、今までの経験回数を10割とし、3つの支払い方で、それぞれの支払い方を何割経験したかを回答させた。

調査対象は高知工科大学経済マネジメント学群の学生男性76名女性61名の計137名とし、2019年11月11日の授業を利用し、調査を実施した。

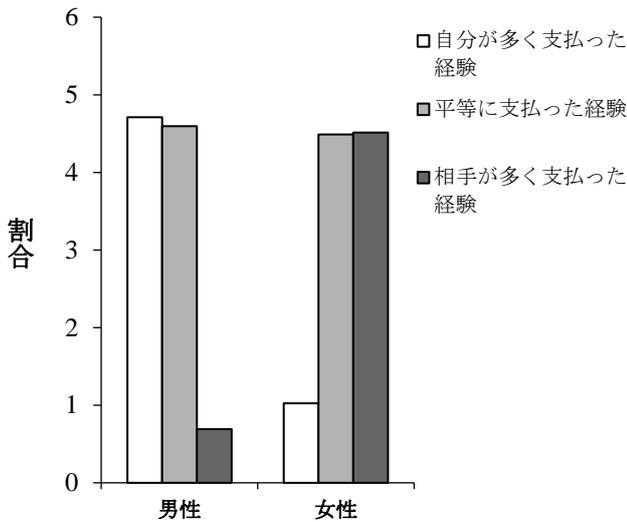
結果

全てのデータはHADを用いて統計分析を行った(清水,2016)。

①被験者の過去の経験に関する分析

「デート代を男性が女性より多く支払う」行動を選択しているだろうという仮説を検証するために、被験者の過去の経験の割合を従属変数、支払い方法と被験者の性別を独立変数とした2要因分散分析を行った。結果、被験者の性別の主効果は有意ではなかった ($F(1, 93)=1.121$, ns.)。支払い方法の主効果は有意であった ($F(2, 186)=10.837$, $p<.01$.)。また、交互作用も有意であった ($F(2, 186)=34.518$, $p<.01$.)。交互作用が有意だったので、被験者の性別ごとに支払い方法の単純主効果を検定したところ、男性においても ($F(2, 186)=28.310$, $p<.01$.)、女性においても ($F(2, 186)=18.020$, $p<.01$.) 有意な効果が見られた。続いて、支払い方法の条件間の差が有意かを多重比較で検証したところ(図1)、男性においては、自分が多く支払った経験と平等に支払った経験に有意な差が見られなかった (ns.)。自分が多く支払った経験と相手が多く支払った経験の間 ($p<.01$)、平等に支払った経験と相手が多く支払った経験の間 ($p<.01$) に有意な差が見られた。すなわち男性は相手が多く支払った経験は最も少なく、自分が多く支払った経験と平等に支払った経験はそれより多く経験しているが、両者は同程度経験していることが示された。女性では、平等に支払った経験と相手が多く支払った経験の間に有意な差が見られなかった (ns.)。自分が多く支払った経験と平等に支払った経験の間 ($p<.01$)、自分が多く支払った経験と相手が多く支払った経験の間 ($p<.01$) に有意な差が見られた。すなわち、女性は自分が多く支払った経験は最も少なく、平等に支払った経験と相手が多く支払った経験はそれより多く経験しているが両社は同程度経験していることが示された。

図1：被験者の過去の経験

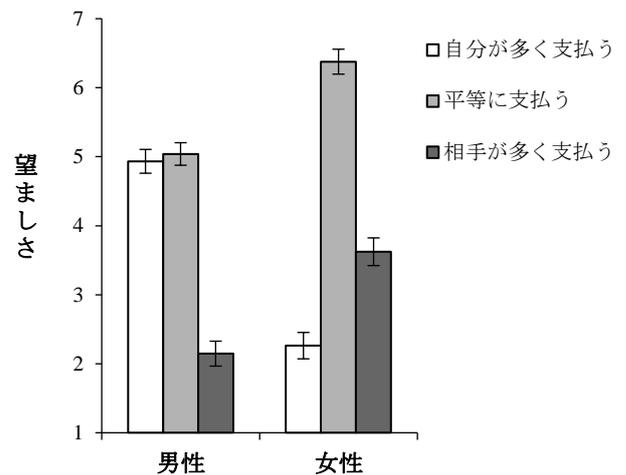


②自分自身が考える望ましさに関する分析

「男性も女性も個人個人ではデート代の支払いは平等に支払うことを望ましいと考えているだろう」という仮説を検証するために、支払い方法について自分自身の望ましさを従属変数、支払い方法と被験者の性別を独立変数とした2要因分散分析を行った。結果、被験者の性別の主効果は有意ではなかった ($F(1, 134)=0.161, ns.$)。支払い方法の主効果は有意であった ($F(2, 268)=110.318, p<.01.$)。また、交互作用も有意であった ($F(2, 268)=70.958, p<.01.$)。交互作用が有意だったので、被験者の性別ごとに支払い方法の単純主効果を検定したところ、男性においても ($F(2, 268)=76.753, p<.01.$)、女性においても ($F(2, 268)=101.931, p<.01.$) と有意な効果が見られた。続いて、支払い方法の条件間の差が有意かを多重比較で検証したところ(図2)、男性においては、自分が多く支払う支払い方と平等に支払う支払い方に有意な差が見られなかった ($ns.$)。自分が多く支払う支払い方と相手が多く支払う支払い方の間 ($p<.01.$)、平等に支払う支払い方と相手が多く支払う支払い方の間 ($p<.01.$) に有意な差が見られた。すなわち、男性は相手が多く支払う支払い方を最も望ましくないと考え、自分が多く支払う支払い方と平等に支払う支払い方はそれよりも望ましいと考えるが、両者は同程度に望ましいと考えていたことが示された。女性では、自分が多く支払う支払い方と平等に支払う支払い方の間 ($p<.01.$)、自分が多く支払う支払い方と相手が多く支払う支払い方の間 ($p<.01.$)、平等に支払う

支払い方と相手が多く支払う支払い方の間 ($p<.01.$) に有意な差が見られた。すなわち、女性は平等に支払う支払い方を最も望ましいと考え、次に相手が多く支払う支払い方、その次に自分が多く支払う支払い方を望ましいと考えていたことが示された。

図2：被験者自身の望ましさ



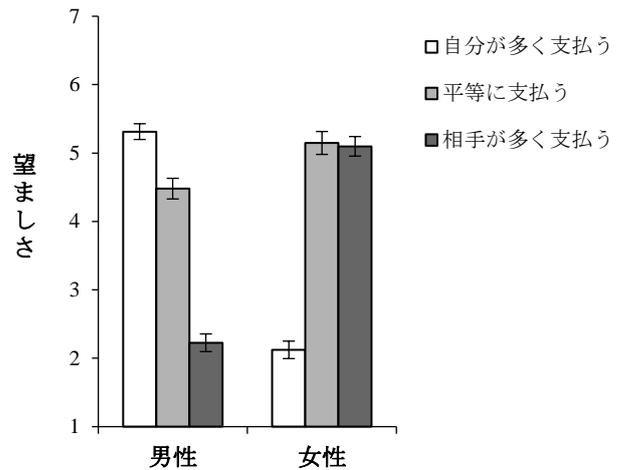
③他人が考える望ましさに関する分析

男性が「デートした時、男性は女性の分までお金を払うのは当然である」という性役割を認知し、性役割の期待に沿った生活をしようとするだろう」という仮説を検証するために、支払い方法について被験者と同性の他人及び被験者と異性の他人の望ましさと、支払い方法の望ましさを従属変数、支払い方法、被験者の性別、望ましさの推測をした他者の性別(他者性別)を独立変数とした3要因分散分析を行った。結果、被験者の性別の主効果 ($F(1, 134)=1.592, ns.$)、他者性別の主効果 ($F(1, 134)=0.000, ns.$)、被験者の性別と他者性別の交互作用効果 ($F(1, 134)=1.076, ns.$)、他者性別と支払い方法の交互作用効果 ($F(1, 268)=1.202, ns.$)、被験者の性別と他者性別と支払い方法の交互作用効果 ($F(2, 268)=2.341, ns.$) は有意ではなかった。従って、本研究の質問紙では被験者にとっての他人を被験者と同性か被験者と異性かで分けて調査したが、被験者にとっての他人の性別は結果に影響がないことが示された。以降本研究では、被験者と同性の他人と被験者と異性の他人をまとめて「被験者の他人」として扱う。

被験者の他人のデータは、被験者と同性の他人のデータと被験者

と異性の他人のデータの平均値で算出した。支払い方法について他人の望ましさを従属変数、支払い方法と被験者の性別を独立変数とした2要因分散分析を行った。結果、被験者の性別の主効果は有意ではなかった ($F(1, 134)=1.592, ns.$)。他者の支払い方に対する望ましさ ($F(2, 268)=36.645, p<.01.$)の主効果は有意であった。また、交互作用も有意であった ($F(2, 268)=204.645, p<.01.$)。交互作用が有意だったので、被験者の性別ごとに支払い方法の単純主効果を検定したところ、男性においても ($F(2, 268)=123.569, p<.01.$)、女性においても ($F(2, 268)=118.267, p<.01.$)と有意な効果が見られた。続いて、支払い方法の条件間の差が有意かを多重比較で検証したところ(図3)、男性においては、自分が多く支払う支払い方と平等に支払う支払い方の間 ($p<.01.$)、平等に支払う支払い方と相手が多く支払う支払い方の間 ($p<.01.$)、自分が多く支払う支払い方と相手が多く支払う支払い方の間 ($p<.01.$)に有意な差が見られた。すなわち、男性は他の人が望ましいと思う支払い方法を推測した場合、自分が多く支払う支払い方を最も望ましいと考え、次に平等に支払う支払い方、その次に相手が多く支払う支払い方を望ましいと考えていたことが示された。女性においては、平等に支払う支払い方と相手が多く支払う支払い方に有意な差が見られなかった ($ns.$)。自分が多く支払う支払い方と平等に支払う支払い方の間 ($p<.01.$)、自分が多く支払う支払い方と相手が多く支払う支払い方の間 ($p<.01.$)に有意な差が見られた。すなわち女性は自分が多く支払う支払い方を最も望ましくないと考え、相手が多く支払う支払い方と平等に支払う支払い方はそれよりも望ましいと考えるが、両者は同程度に望ましいと考えていたことが示された。

図3：被験者の他人の望ましさ



④自分が多く支払う支払い方に対するの自分と他人の望ましさの違いに関する分析

「自分自身の考えと性役割にギャップを感じているだろう」という仮説を検証するために、自分が多く支払う支払い方に対する望ましさを従属変数、評価者が自分であるか他人であるかと被験者の性別を独立変数とした2要因分散分析を行った。結果、被験者の性別の主効果は有意であった ($F(1, 134)=281.127, p<.01.$)。評価者が自分であるか他人であるかの主効果は有意ではなかった ($F(1, 134)=0.835, ns.$)。また交互作用も有意ではなかった ($F(1, 134)=0.051, ns.$)。すなわち、自分が多く支払う支払い方に対する望ましさは男性と女性では男性の方が望ましいと考え、女性は男性より望ましくないと考えているが、被験者の望ましさと被験者が想定する他人の望ましさは同程度であることが示された。

図4：自分が多く支払う望ましさ

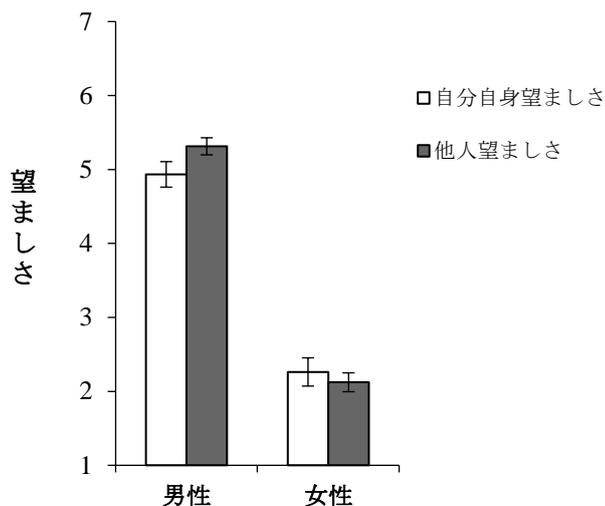
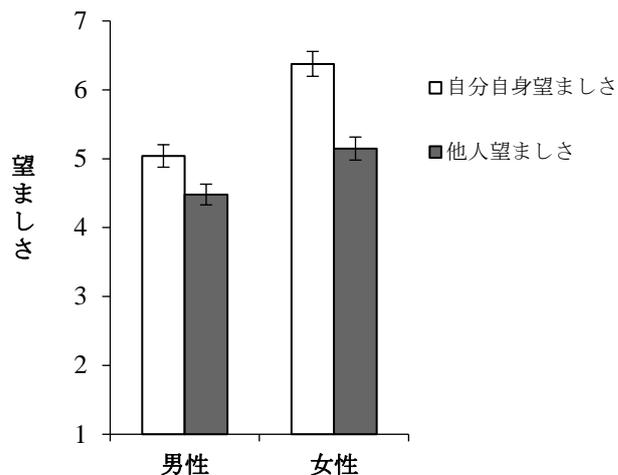


図5：平等に支払う望ましさ



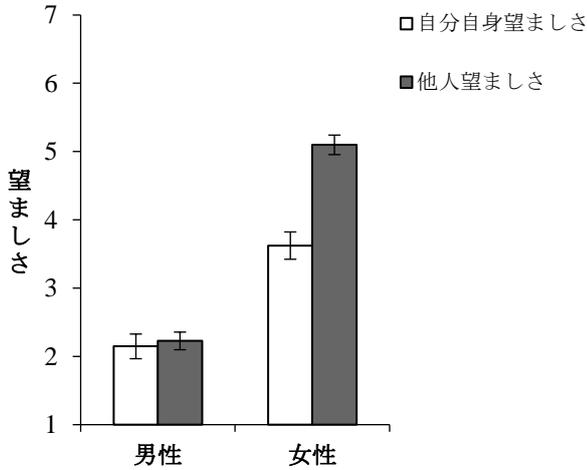
⑤平等に支払う支払い方に対しての自分と他人の望ましさの違いに関する分析

「自分自身の考えと性役割にギャップを感じているだろう」という仮説を検証するために、平等に支払う支払い方に対する望ましさを従属変数、評価者が自分であるか他人であるかと被験者の性別を独立変数とした2要因分散分析を行った。結果、被験者の性別の主効果 ($F(1, 134)=27.427, p<.01.$) と評価者が自分であるか他人であるか的主効果 ($F(1, 134)=43.510, p<.01.$) は有意であった。また交互作用も有意であった ($F(1, 134)=6.090, p<.05.$)。交互作用が有意だったので、被験者の性別ごとに評価者が自分であるか他人であるかの単純主効果を検定したところ(図5)、男性においても ($F(1, 134)=9.500, p<.01.$)、女性においても ($F(1, 134)=37.245, p<.01.$) と有意な効果が見られた。すなわち、男性は平等に支払う支払い方に対して自分は他人より望ましいと考えていることが示された。また女性は平等に支払う支払い方に対して自分は他人より望ましいと考えていることが示された。また、交互作用が有意であったことから、他人と自分との差に関して、男性よりも女性の方が大きいことが示された。

⑥相手が多く支払う支払い方に対しての自分と他人の望ましさの違いに関する分析

「自分自身の考えと性役割にギャップを感じているだろう」という仮説を検証するために、相手が多く支払う支払い方に対する望ましさを従属変数、評価者が自分であるか他人であるかと被験者の性別を独立変数とした2要因分散分析を行った。結果、被験者の性別の主効果 ($F(1, 134)=124.441, p<.01.$) と評価者が自分であるか他人であるか的主効果 ($F(1, 134)=35.670, p<.01.$) は有意であった。また交互作用も有意であった ($F(1, 134)=28.709, p<.05.$)。交互作用が有意だったので、被験者の性別ごとに評価者が自分であるか他人であるかの単純主効果を検定したところ(図6)、男性において、有意な差が見られなかった ($F(1, 134)=0.210, ns.$)、すなわち男性は相手が多く支払う支払い方に対して、被験者の望ましさと同程度であることが示された。女性において、 ($F(1, 134)=58.199, p<.01.$) と有意な効果が見られた。すなわち、女性は相手が多く支払う支払い方に対して他人は自分より望ましいと考えていることが示された。

図6：相手が多く支払う望ましき



考察

本研究では、自分が多く支払う支払い方と平等に支払う支払い方、相手が多く支払う支払い方の3種類の支払い方に対する望ましさを調査した。渡邊(2017b)では男性に対しての性役割として「デートした時、男性は女性の分までお金を払うのは当然である」というものが存在することが示されているが、本研究では男性も女性も「男性が多く支払う支払い方より、平等に支払う支払い方を望ましき」と考えているのではないかと仮説を立てた。そこで、被験者自身の望ましきと被験者に想定させた他人の望ましきを比較した。

①男性についての考察

男性の自分自身の望ましきに関する結果を見ると、自分が多く支払う支払い方と平等に支払う支払い方の望ましきが同程度であった。また、被験者に想定させた他人の望ましきに関する結果を見ると、男性は自分が多く支払う支払い方を最も望ましきと考えていた。さらに、男性の自分が多く支払う支払い方についての望ましきに関して、自分自身が望ましきと思う程度と、他者が望ましきと思う程度に関して、差が見られなかった。これらの結果は仮説を支持しない結果である。これらの結果が得られた理由についてはいくつかの可能性が考えられる。

一つ目には、そもそも男性は性役割を望ましきものとして認識している可能性がある。仮説では橋本(2011)の研究をもとに、「男性

が考える自身の望ましきと男性役割が示す望ましきには違いがあるのではないかとしていたが、実際は男性役割を、男性が望ましきものとして内在化している可能性がある。

二つ目には男性がPleck(1976)で示された「男性の価値は経済力で決定する」といった伝統的な性役割を認識することによって、女性に対して経済力すなわち自身の価値をアピールしている可能性がある。

三つ目には、男性が女性に対して支配欲を持っている可能性がある。性役割とは異なるが、濱口・藤原(2016)では少年の反社会的問題やいじめ問題に着目し、少年の攻撃的問題行動の心理的な理解を目的として高校生を対象に質問紙調査を行った。この質問紙調査の中に、「仲間支配欲求」という項目が存在し、その内容は「仲間を自分の思い通りに動かしたいと思う」や「自分の思い通りに動いてくれる仲間が欲しい」などであった。また、「仲間支配欲求」の項目には性別の主効果があることが示されており、男性の方が女性より「仲間支配欲求」強いことが分かっている。このことから、男性の方が女性よりも支配欲が強く、デート代を男性が多く払うことによって、「女性を思い通りに動かしたい」と考えている可能性がある。

②女性についての考察

女性の自分自身の望ましきに関する結果を見ると、平等に支払う支払い方が最も望ましき支払い方であった。また、被験者に想定させた他人の望ましきに関する結果を見ると、女性は平等に支払う支払い方に対する望ましきと男性が多く支払う支払い方に対する望ましきが同程度であった。さらに、平等に支払う支払い方についての望ましきに関して、被験者が女性の場合、自分自身が望ましきと思う程度は被験者が想定した他人が望ましきと思う程度より高かった。また、男性が多く支払う支払い方についての望ましきに関して、被験者が女性の場合、自分自身が望ましきと思う程度より被験者が想定した他人が望ましきと思う程度の方が高かった。これらの結果は仮説を支持する結果である。この結果が得られた理由についてはいくつかの可能性が挙げられる。

一つ目は女性が女性の性役割を望ましきものとして内在化している可能性がある。土肥(1988)では男女の性別にかかわらず、

男性にとって社会的に望ましいとされるパーソナリティ特性(男性性)と、女性にとって社会的に望ましいとされるパーソナリティ特性(女性性)の両方を志向する状態である「男女両性具有」について調査した。その過程で「アンドロジニー・スケール」を作成した。アンドロジニー・スケールとは Bem(1974)で調査された男性役割 200 項目と女性役割 200 項目のうち有意であった男性性 20 項目と女性性 20 項目から作成されており、これに中性項目としてさらに 20 項目が追加されたものである。このアンドロジニー・スケールに記された女性性項目の中に「人に尽くす」が含まれていた。すなわち女性が人に尽くすことが社会的に望ましいものとして広まってしまっている。女性はそのことを認識し、社会一般的には「女性が男性を立てることは望ましいこと」と考えられていると認識しているため、男性が多く支払う支払い方についての望ましさに関して、自分自身が望ましいと思う程度より被験者が想定した他人が望ましいと思う程度の方が高くなった可能性がある。しかしこの場合、女性の被験者が自分自身の望ましさでは平等に支払う支払い方を最も望ましく考えていることから、女性は自分自身では「人に尽くす」という女性の性役割を望ましくないものとして内在化している可能性が高い。東(1990)では青年期における性役割に対する志向性の性差について大学生を対象に調査した結果、男子学生よりも女子学生のほうが性役割分担に対して否定的な意見を持っていることが示された。本研究でも男性は他人の望ましさと自身の望ましさに差は見られなかったが、一方女性は他人の望ましさと自身の望ましさに差が見られた。このことから、性役割は女性にとって望ましくないものである可能性がある。

二つ目は調査対象が大学生であったため、男性に経済力を求めている可能性はある。大学生は男性と女性に収入差が小さいため、自分自身の望ましさでは平等に支払う支払い方を最も望ましいと考えた可能性がある。一方、他人を想定した時、その他人が被験者によっては学生ではなく、社会人を想定した可能性がある。その場合、一般に社会的に自分より収入が多い社会人男性に多く支払ってもらおう支払い方を望ましいと考えた可能性がある。

三つ目には女性が「男女平等」を望ましいと考えている可能性がある。これに関しては男性にも当てはまる可能性があるが、本研究の序論でもふれた、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」

という考え方に対しての内閣府の調査を見ると、年々賛成派の意見が減少し、反対派の意見が増大している。このことから「男女平等」に対する考え方が年々社会的に望ましいものとして変化している可能性がある。

まとめ

本研究では、性役割の中でも特に、男性がデート代を多く支払うという行動に着目し、自分が多く支払う支払い方、平等に支払う支払い方、相手が多く支払う支払い方のそれぞれの支払い方法の望ましさを調査することで、性役割が示す望ましさと自分自身が考える望ましさの違いについて分析した。結果、男性は自分自身が考える望ましさと、他人が考える望ましさの間に差がなく、女性は自分自身が考える望ましさと、他人が考える望ましさに差があることが示された。このことから、男性は男性に対する性役割を望ましいものとして内在化している可能性があり、女性は女性に対する性役割を望ましくないものとして内在化している可能性があることが示された。しかし本研究では、それぞれの支払い方法をなぜ望ましいと回答したかを聞いていなかったため、その原因を正確に測ることはできなかった。

また女性において、自分自身の望ましさと他人の望ましさに差があることから、女性は女性に対しての性役割だけでなく、男性に対する性役割も望ましくないものと認識している可能性がある。しかし本研究では男性役割のうち、「デート代は男性が女性の分も支払うのが当然である」のみを取り扱ったため、他の男性役割を女性がどのように認識しているか調査することはできなかった。

本研究では男性と女性とで性役割に対する認識の仕方に違いがある可能性があることが示された。この場合、「男女平等」の実現を目指す上で性役割そのものが妨げになってしまっている可能性がある。今後、男性と女性のそれぞれが性役割をどのように認識しているかを調査することが「男女平等」を実現する上で必要なことになるかもしれない。

参考文献

東清和, 1990, 青年期における性役割志向性の性差. 社会心理学研究, 6, 23-32

- Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 42, 155-162
- 土肥伊都子, 1988, 男女両性具有に関する研究-アンドロジニー・スケールと性別化得点-. 関西学院大学社会学部紀要, 57 号, 89-97.
- 濱口佳和・藤原健志, 2016, 高校生の能動的・反応的攻撃性に関する研究-尺度構成, 2 種類の攻撃行動と関連ならびに下位類型の検討-. 教育心理学研究, 64, 59-75
- 橋本博文, 2011, 相互協調性の自己維持メカニズム. 実験者社会心理学研究, 50, 182-193
- 伊藤裕子・秋津慶子, 1983, 青年期における性役割観および性役割期待の認知. 教育心理学研究, 31, 146-151
- Pleck, J. H. , 1976, The male sex role: Definitions, problems, and sources of change. Journal of Social Issues, 32, 155-164
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 渡邊寛, 2017a, 伝統的な男性役割態度尺度の作成と信頼性・妥当性の検証. 心理学研究, 88, 488-498
- 渡邊寛, 2017b, 新しい男性役割尺度の開発と信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 88, 251-259